日上和田古墳

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集

1981

津山市教育委員会

序

津山市日上和田古墳は昭和55年度の日上地区土地改良整備事業（ほ場整備事業）施行区域内にあり，事業実施にあたり緊急発掘調査したものであります。

この古墳付近には日上天王山古墳，日上畝山古墳群などがあり古墳時代を研究する上で非常に重要な地域であります。本古墳はこれらの古墳群との関連において注目すべきものでありましたが，残念ながら破壊がかなり進んでおり当初予想していた成果にはいたらなかったものの古代の様子を知る上で貴重な資料を得ることができました。調査は予定期間より多少長引きましたが，無事作業を終わることができましたので，ここに調査の結果を報告いたします。各位のご活用をいただければと存じます。

最後になりましたが，この調査に際しご協力をいただきました関係各位に深く謝意を表しまして序といたします。

昭和56年３月31日

津山市教育委員会

教育長　福島祐一

目　次

第１章　立地と周辺の遺跡 …… 1

第２章　調査の経過 …… 2

　第１節　調査に至る経過 …… 2

　第２節　調査の経過 …… 3

第３章　調査の記録 …… 4

　第１節　古　墳 …… 4

　第２節　住居址 …… 13

　第３節　土　拡 …… 15

第４章　結　　語 …… 16

例　言

1．本書は津山市教育委員会が，津山市日上地区の土地改良総合整備（同和）事業,としての，ほ場整備事業の一環として実施した日上和田古墳発掘調査の報告書である。

1．調査は昭和55年５月１日から６月５日まで実施した。

1．調査にあたっては，墳丘測量に社会教育課安川豊史の援助を得た。

1．遺物整理は，津山市埋蔵文化財発掘調査補助員松本真澄，光延稲造の協力を得た。

1．本書に用いた高度は海抜高である。また，方位は磁北である。

1．本書の執筆は社会教育課行田裕美が行なった。

1．本書の作成にあたっては，社会教育課湊　哲夫，中山俊紀，安川豊史の助言を得た。

挿　図

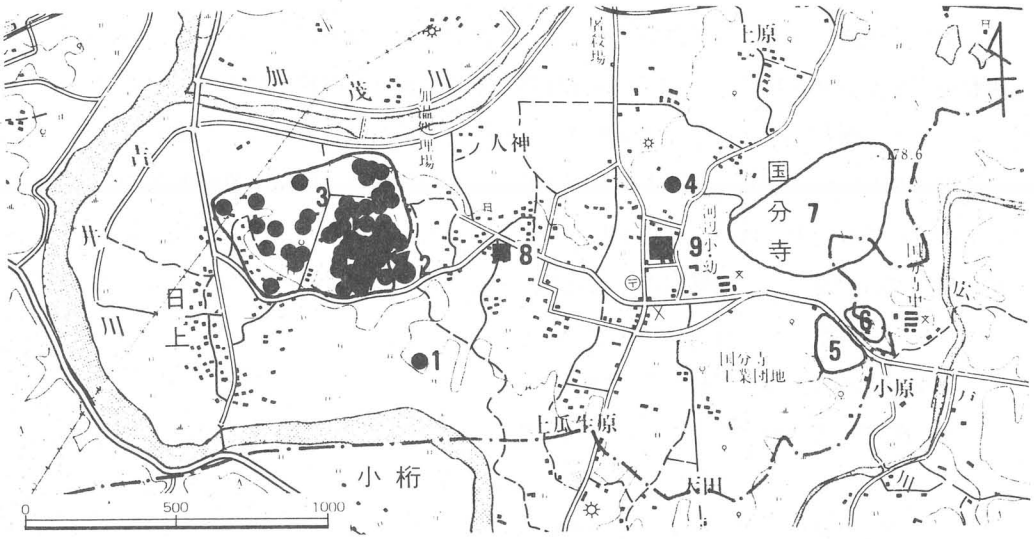
第１図　日上和田古墳と周辺遺跡分布図 --- 1
第２図　調査前墳丘測量図 ---------- 3
第３図　表土除去後墳丘測量図 ---------- 4
第４図　周湟断面図 ---------- 5
第５図　ハニワ出土状態実測図 ---------- 5
第６図　墳丘表面及び表土中遺物実測図(1)-- 6
第７図　墳丘表面及び表土中遺物実測図(2)-- 7
第８図　表土中ハニワ実測図 ---------- 8
第９図　トレンチ配置図と墳丘断面図 ------ 9
第10図　墳丘断面図 ---------- 10
第11図　盛土内遺物実測図 ---------- 11
第12図　住居址・土拡位置図 ---------- 12
第13図　住居址実測図 ---------- 13
第14図　住居址内遺物実測図 ---------- 14
第15図　土拡及び遺物出土状態実測図 --- 15
第16図　土拡内遺物実測図 ---------- 16
第17図　表採瓦実測図 ---------- 17

図　版

図版１－１　調査前（東から）
　　２　調査前（北から）
　　３　立木伐採後（東から）
　　４　立木伐採後（北から）
　　５　古墳発掘風景
　　６　古墳発掘風景
図版２－１　周湟（西から）
　　２　周湟（東から）
　　３　墳丘東西断面
　　４　墳丘南北断面
　　５　周湟断面
図版３－１　集石出土状態
　　２　ハニワ出土状態
　　３　集石・ハニワ出土状態(西から)
　　４　住居址発掘風景
図版４－１　土拡及び土器出土状態
　　２　住居址・土拡
　　３　住居址・土拡
　　４　和田古墳より畝山古墳群を望む
図版５　　出土遺物(1)
図版６　　出土遺物(2)

第１章　立地と周辺の遺跡

日上和田古墳は岡山県津山市日上字和田275番地に所在する。中国山地から南に樹枝状に派生する低丘陵の間に挟まれた小支流は南下して吉井川へと合流する。吉井川は津山市街地に入り，流路を東へと大きく変え，津山市川崎付近からふたたび流路を南へと変える。丁度この付近で加茂川と合流する。この一帯は畝山と称する一独立小丘陵を有する沖積平野をなしている。この地域は津山市内においても，非常に遺跡の密なところで，特に日上畝山古墳群を代表とする古墳の密集地である。また，古墳時代以降奈良時代になると，美作国分寺，美作国分尼寺もこの地におかれるなど，古代においてはかなり重要な地位を占めていた地域と考えられる。日上和田古墳(第１図－１)は畝山から南へ援やかに延びた低丘陵の先端部に１基だけ独立して位置しており，すぐ南には吉井川を見おろすことができる。周辺の遺跡を概観すると，日上天王山古墳(第１図－２)，日上畝山古墳群(第１図－３)，国分寺飯塚古墳(第１図－４)，国分寺長畝山古墳群(第１図－５)，国分寺長畝山北古墳群(第１図－６)，観音山古墳群(第１図－７)，美作国分尼寺跡(第１図－８)，美作国分寺跡(第１図－９)などがあげられる。日上天王山古墳は前長55m の前方後円墳で，前方部の形態などから津山市内で最古の古墳に属するものと考えられている(註１)。日上畝山古墳群は前方後円墳１基と円墳60基の計61基からなる古墳群で，５世紀後半から６世紀前半にかけての古式の群集墳である(註２)。国分寺飯塚古墳は直径35m，高さ６m の円墳で，墳丘斜面には河原石による葺石がみられる。５世紀前半頃の築造と考えられている(註３)。国分寺長畝山古墳群は10基，国分寺長畝山北古墳群は14基の円墳よりなり，６世紀初頭から前半にかけての築造と考えられている(註４)。この内，国分寺長畝山１号墳，同２号墳は発掘調査され，５世紀後半のものと推定されている(註５)。観音山古墳群は８基よ



第１図　日上和田古墳と周辺遺跡分布図

り構成されるが，時期は不明である。美作国分寺跡は昭和51年から４ケ年にわたる発掘調査で，金堂・講堂・中門・回廊・塔・南門・北方建物・寺域を画する溝などの主要遺構が確認され，ほぼその全容が解明された(註６)。美作国分尼寺跡は国分寺西方約500m に位置する。方１町の寺域が想定されているが，伽藍については全く不明である。

註

（１）　今井　堯　「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第１巻』1972
　　安川豊史　「古墳時代」『図録津山の史跡』1978

（２）　今井　堯　前掲書
　　今井　堯・近藤義郎　「群集墳の盛行」『古代の日本４中国・四国』1970
　　安川豊史　前掲書

（３）　今井　堯　前掲書
　　安川豊史　前掲書

（４）　今井　堯　前掲書

（５）　河本　清　「美作考古学の現状と課題」『古代吉備第７集』1971

（６）　湊　哲夫・安川豊史・行田裕美　『美作国分寺跡発掘調査報告』1980

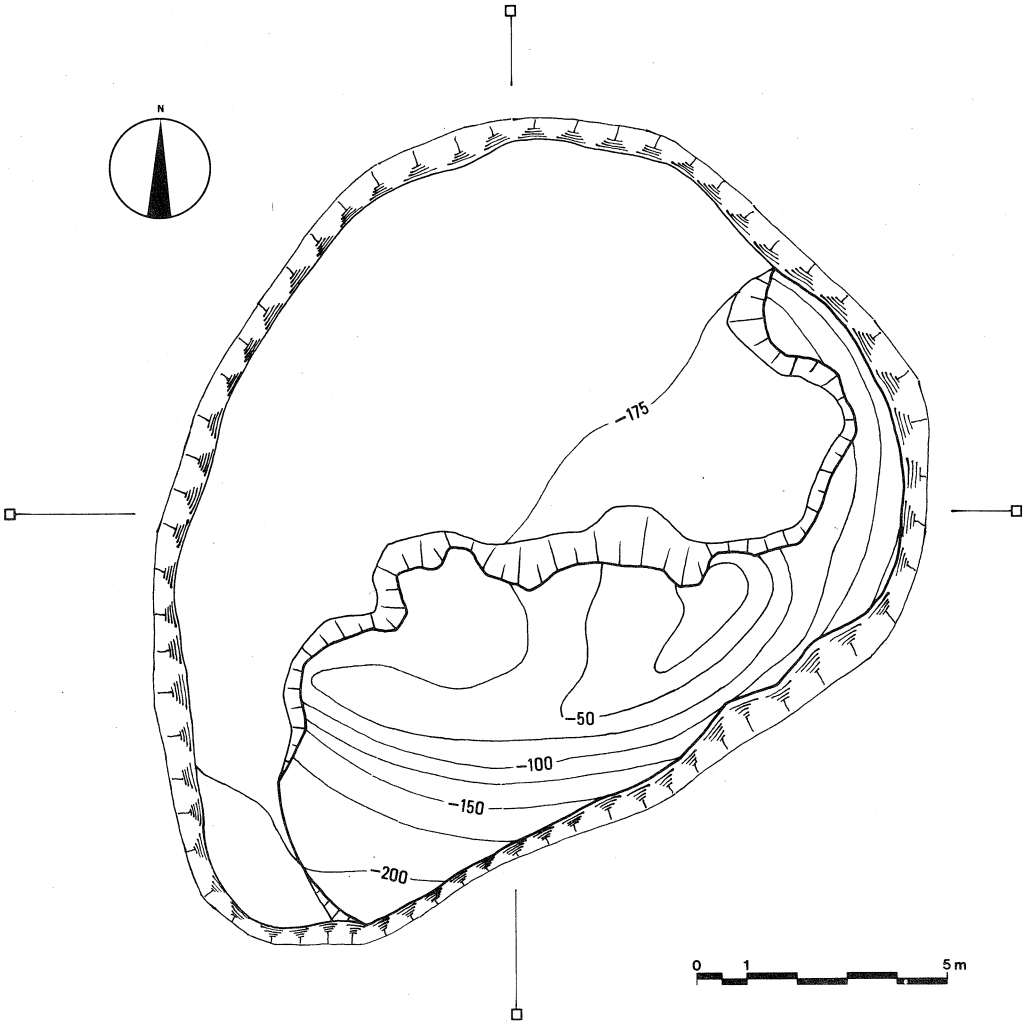
尚，古墳群は『岡山県遺跡地図（第１分冊)』岡山県教育委員会1973に拠った。

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

津山市日上地区一帯では，昭和52年度より，土地改良総合整備事業（同和対策事業)として，ほ場整備事業が実施されており，昭和56年度終了予定で現在も継続中である。昭和54年度において，１ケ所「塚」と呼ばれている高まりがあるので，分布調査を行なった結果，大きく破壊されて墳丘をわずかに残すだけの古墳と解された。この古墳は『岡山県遺跡地図(第１分冊)』には記載されておらず，新しく発見されたものであった。このため，津山市教育委員会では，ほ場整備事業の一還として発掘調査を実施し，記録保存することとなった。発掘調査は昭和55年５月１日から開始し，６月５日に終了した。

発掘調査主体　津山市教育委員会
事務担当　須江尚志　（社会教育課長）
　　宇那木俊介（社会教育課文化係長）
調査員　行田裕美　（社会教育課）
調査補助員　松本真澄



第２図　調査前墳丘測量図

第２節　調査の経過

調査地周辺はもともと水田であったが，調査時にはすでに，ほ場整備事業が進んでおり，本古墳だけが造成された水田に孤立するという状況であった。調査は昭和55年５月１日から実施したが，破壊部はゴミ捨て場に使用されており，墳丘残存部には雑木が繁茂していた。このため，調査はゴミの除去と立木の伐採から始めなければならなかった。以下，概要は次の通りである。

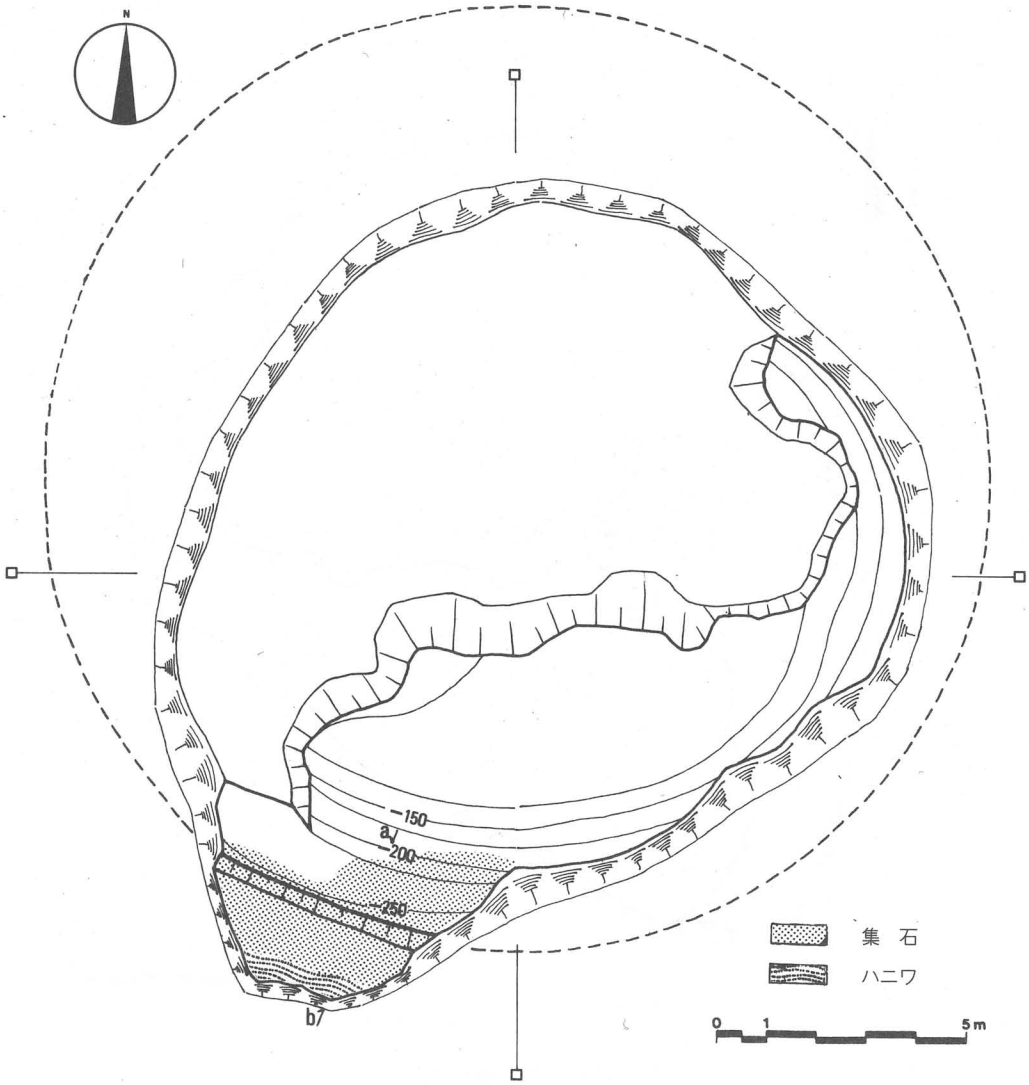
昭和55年５月１日～２日　ゴミ除去，立木伐採，草刈り，写真撮影，墳丘測量

５月６日～10日　表土剝ぎ，写真撮影，墳丘測量

５月12日～14日　墳丘切断東西トレンチ発掘，写真撮影，実測

５月16日～20日　墳丘切断南北トレンチ発掘，写真撮影，実測

５月22日～６月５日　住居址，土拡発掘，写真撮影，実測



第３図　表土除去後墳丘測量図

５月23日　岡山県教育委員会文化課吉光課長補佐，河本係長視察。

尚，調査には次の方々の参加を得ました。記して厚くお礼申し上げます。

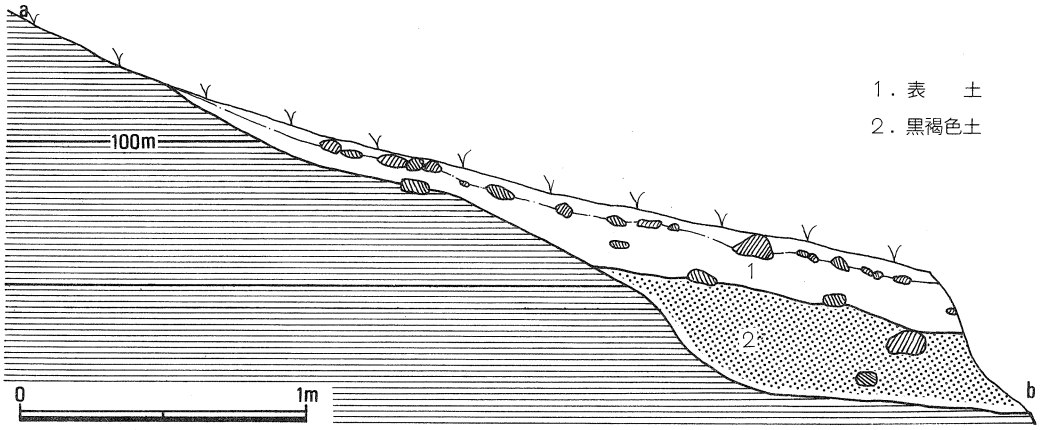
松永一平，中原通継，大笹美喜助，松永石野，立石喜美江，花房琴枝

第３章　調査の記録

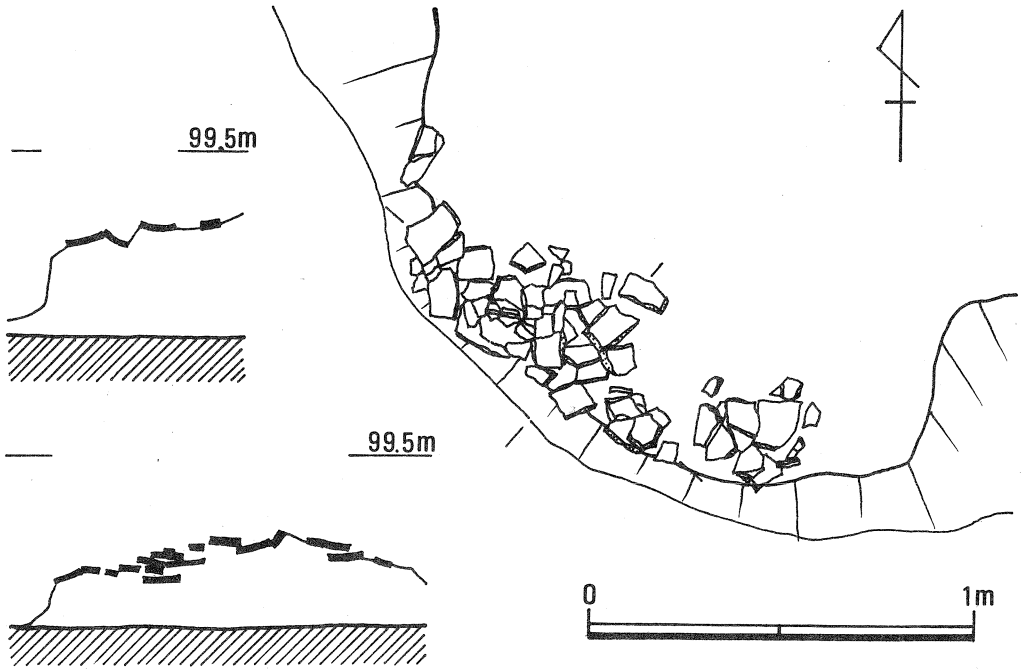
第１節　古　墳

墳丘（第２図，第３図）

本古墳は大きく破壊されており，主体部もなく，わずかに墳丘の南側と東側を孤状に残すだ



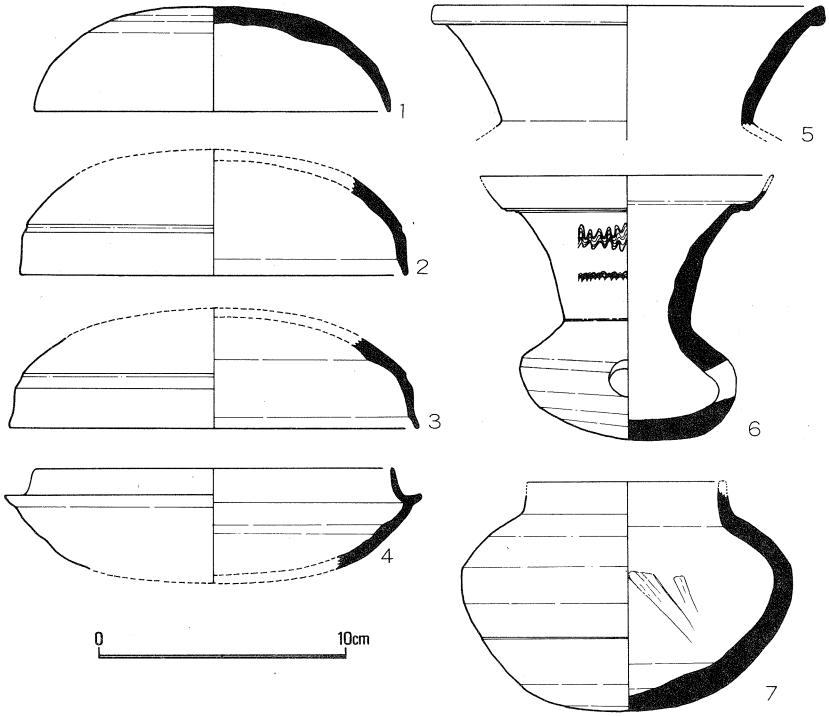
第４図　周湟断面図



第５図　ハニワ出土状態実測図

けである(第２図)。地元住民の話によると，昭和の初め頃，土取りをしたとのことであった。須恵器などの遺物が出土したらしいが，現在その所在は不明である。内部主体についても全く不明である。立木伐採，草刈り，清掃後の墳丘表面には挙大の石が散乱していた。これは地山に含包されている石で，水田，畑の耕作時に出たものを運んできて捨てたものである。墳丘残存部での墳頂は平担，あるいはややくぼんでいるが，これも土取りの際に削られたものである。表土を除去する際に，墳丘南西部において集石を検出した(図版３－１)。当初，この集石は葺石の一部かとも考えられたが，掘り進めた結果，ガラスやビンの破片が発見され，前述のごとく，石を運んできて捨てたものであることが確認された。さらに集石の南側において，二次的

な移動によると考えられるハニワ片がまとまって表土中より出土した（第５図，図版３－１・２）。表土除去後の墳丘測量図から，築造時の墳丘の規模を推定復元すると径約19ｍぐらいになるであろう。そして，周囲を幅約２ｍの周湟がめぐっていたものと考えられる(第３図)。



第６図　墳丘表面及び表土中遺物実測図(１)

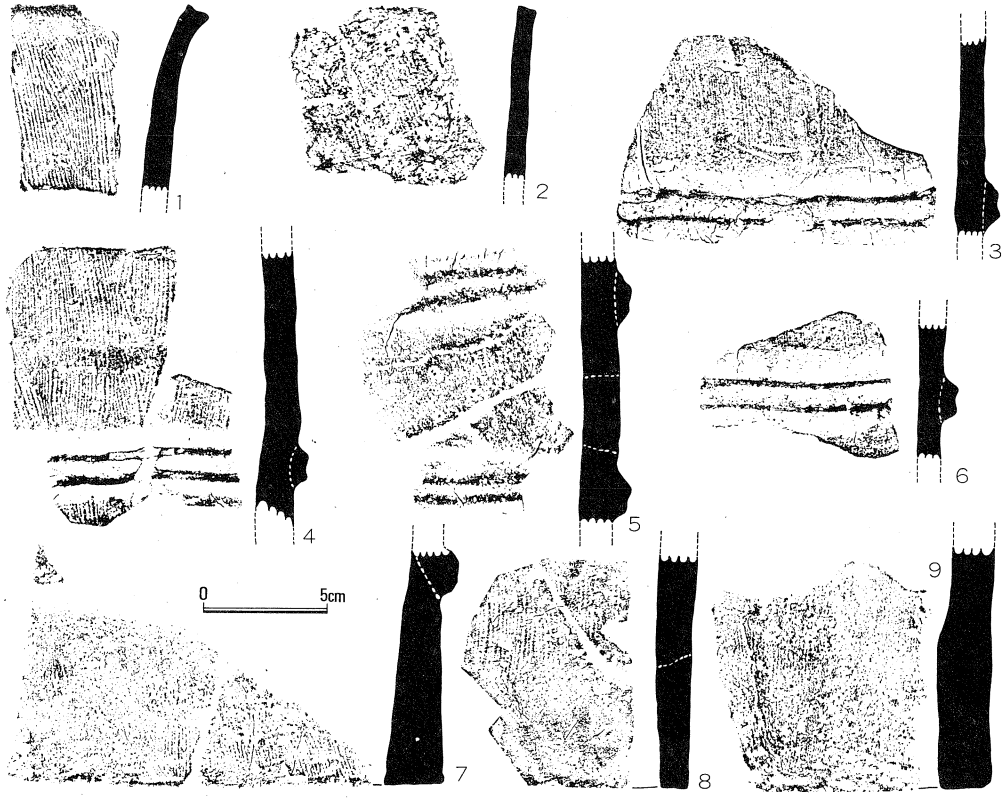
周　湟（第３図，第４図）

墳丘残存部の南西部においてわずかにその形状を留めていた。残存部の長さは約 4.5m，幅は約２ｍを測る(第３図)。深さは約50cmである。周湟埋土上層の表土中には，ハニワ片がまとまって出土したが，この出土状態はハニワが立てられていたような状態ではなく，倒れたままの状態で横たわっていること，周湟上の表土中に位置することなどから，二次的な移動によるものと考えられた。周湟埋土層はやや粘性のある黒褐色土であり，遺物は包含されていなかった(第４図)。

墳丘表面及び表土中須恵器観察表（第６図）

単位(cm)

番号	器　形	口径	器高	形　態・手　法　の　特　長　，そ　の　他
1	杯　蓋	14.4	4.2	器壁は厚ぼったい。口縁端部は丸くおさめている。天井部と口縁部とをわける境界に凹線は施されない。天井部は荒いヘラ削りを施す。
2	杯　蓋	15.8		口縁端部の端面は内傾し，内面との間に明瞭な稜線を作っている。天井部と口縁部を画する凹線をめぐらす。
3	杯　蓋	16.7		２と同様口縁端面は内傾し，内面との間に明瞭な稜線を残す。天井部と口縁部の境界には凹線がめぐる。
4	杯　身	14.6		たちあがり部はやや内傾しながら上方へのび，受部はやや上向きに外方へのび，端部はどちらも丸くおさめる。
5	広口壺	16.0		やや外反する口縁部で端部は丸く外方におさめる。体部は不明。内面には淡緑色の自然釉がかかっている。
6	𤮈	推定 12.0	推定 10.8	口縁端部を欠く。偏平な体部にラッパ状に開く口縁部がつく。口縁部中間には幅のあるクシ描き波状文と幅の狭い波状文が２本めぐる。
7	短頸壺	推定 8.1	推定 9.3	口縁部はやや内傾してたちあがる。体部外面はヘラ削りを施し，下部には１本の沈線がめぐる。内面には縦方向の指なでが認められる。

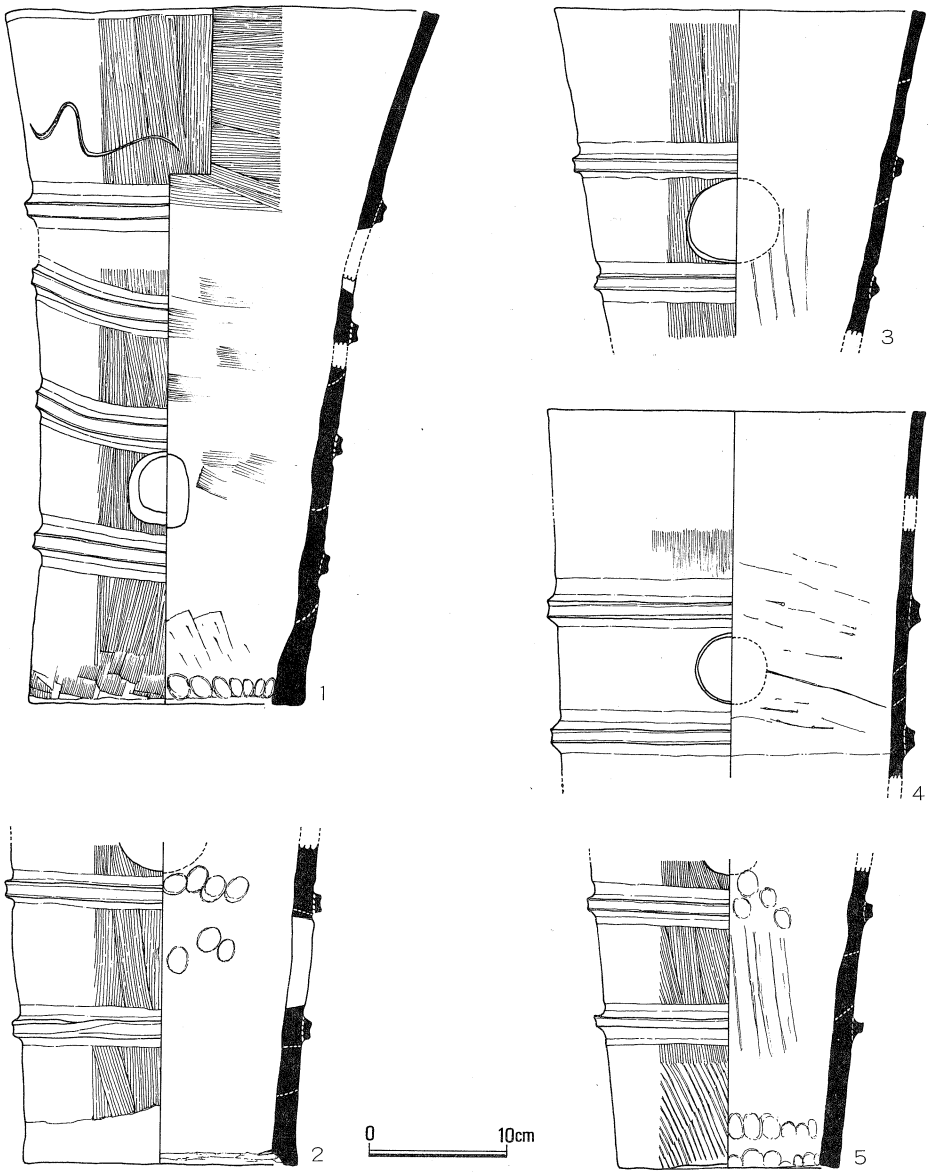


第７図　墳丘表面及び表土中遺物実測図（２）

墳丘表面及び表土中の遺物（第６図，第７図）

墳丘残存部表面には，弥生土器片，須恵器片，ハニワ片が散乱していた。しかし，いずれも小破片が多数を占めた。表土中にも，須恵器片，ハニワ片などが認められたが，ガラスびん，茶わん，針金なども含まれており，土取り，削平の際にかなり移動したものと考えられる。従って，表面採集の土器と表土中出土土器の接合もあった。第６図―１はその例である。これらのことから，墳丘表面採集の土器と表土中出土土器とは一括して扱うことにした。このうち，第６図には須恵器をあげた。個々の記述は観察表の通りである。

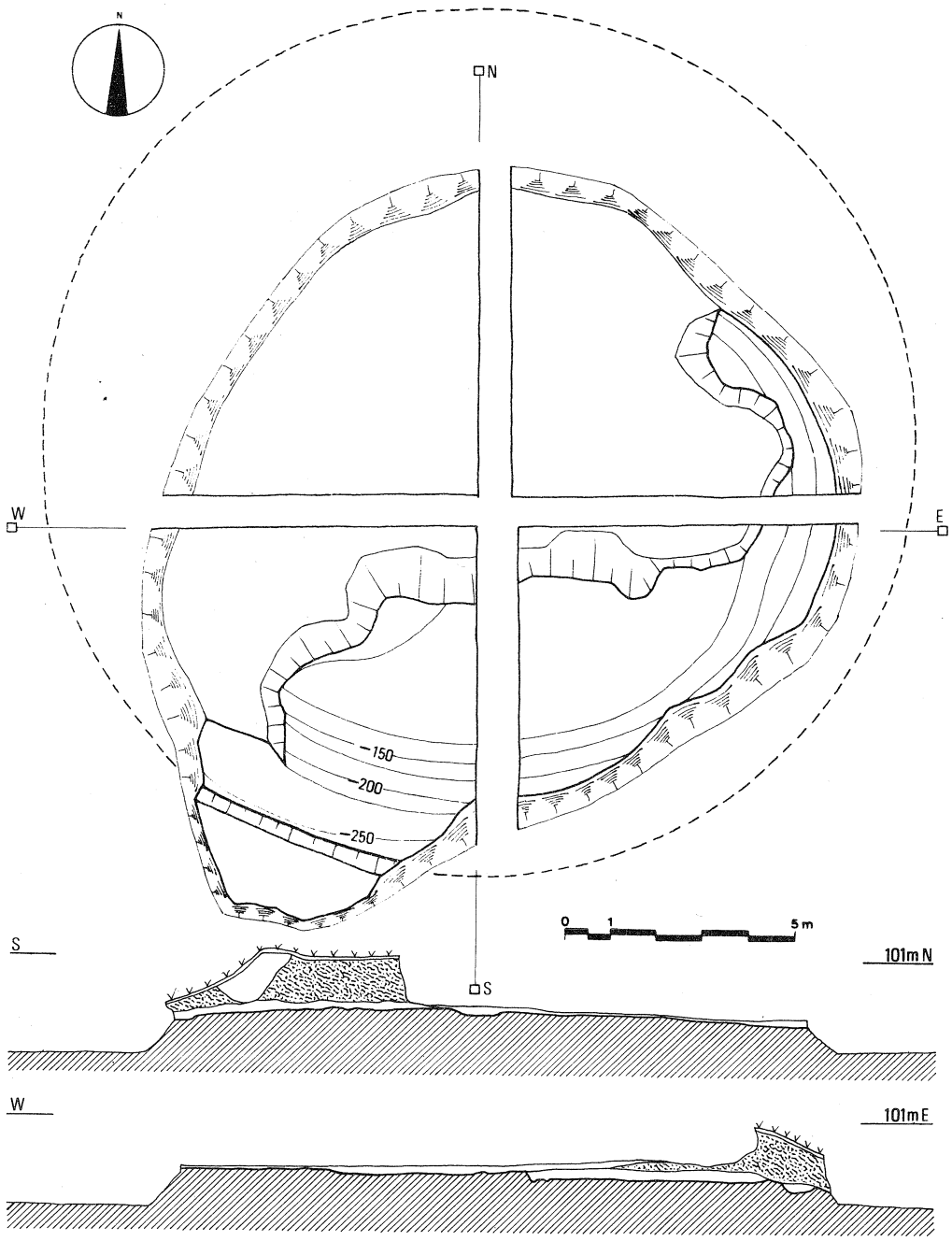
第７図にはハニワ片をあげた。ハニワは須恵器に比べて量的に多いが，保存状態が悪く，内外面の調整のわかるものは少ない。１・２は円筒ハニワの口縁部である。１は２に比べより外反する。口縁端面にはどちらも凹線をもつ。外面には縦方向の刷毛目が施されている。１の内面は口縁部近くは横なで，下方は縦方向の指なで仕上げである。７・８・９は底部である。７・９は部厚い器壁であるのに対し，８はやや薄く仕上げられている。外面はいずれも縦方向の刷毛目が施される。７・９は底部下端まで刷毛目が施されるが，８は下端まで刷毛目が及んでない。内面の調整がわかるのは８だけである。８は縦方向の指なでによる仕上げである。４・５・６は胴部である。外面は全て縦方向の刷毛目仕上げである。内面は６が横方向の刷毛目を施し



第８図　表土中ハニワ実測図

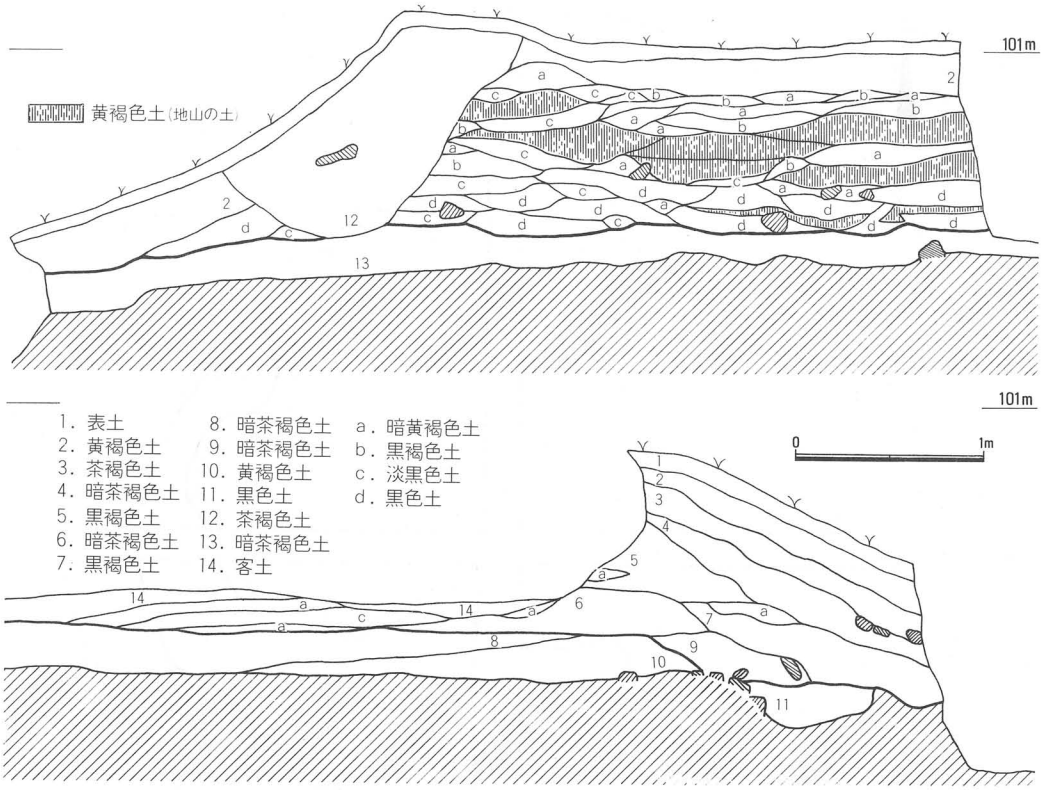
た後，その上を指でなでて仕上げている。４は縦方向の指なで仕上げである。タガはいずれも張りつけである。器壁断面は９を除き，いずれも青灰色を呈している。中でも１・３・４は非常に堅く須恵質を呈す。

第８図は周湟上の表土中出土のハニワ一括遺物である。１は唯一復元可能であった円筒ハニワである。底径20cm，口径37cm，器高55cmを測る。ただ器高については，胴部が途中欠けているので，推定復元高である。器形は底部から口縁部へかけて援やかに開き，ラッパ状を呈す。



第９図　トレンチ配置図と墳丘断面図

口縁端面には凹線がめぐる。タガは胴部を４本めぐるが，タガ間は平行ではなく，幅の広いところ，狭いところがある。透し孔は下から１本目と２本目のタガ間と３本目と４本目のタガ間にあけられている。口縁部外面にはヘラ描きによる波状文が１本幅14cmにわたり施されている。内面は下端が指頭による押さえ，その上部にはヘラ削りの痕跡がみられる。胴部には横方向の刷毛目が残っているが，大半はなでによって消されている。口縁部付近は横方向の刷毛目仕上

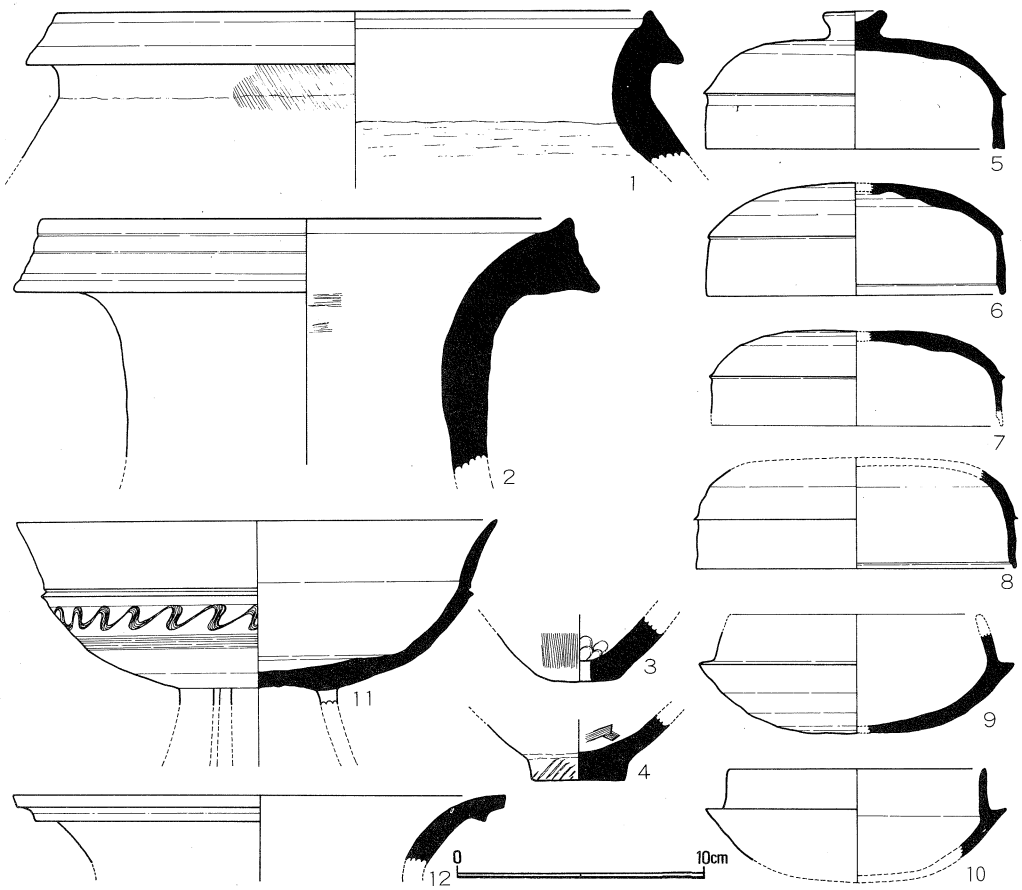


第10図　墳丘断面図

げである。外面は全て縦方向の刷毛目調整である。３・４は胴下半部を欠く。１・２・３・５がラッパ状に開く器形であるのに対して，４は円筒に近い器形である。３・４とも外面は縦方向の刷毛目仕上げである。４は保存状態が悪く，わずかに刷毛目を残すのみである。内面は３が縦方向の指なで，４が横方向のヘラ削りで仕上げている。３の口径は27cm，４は27.4cmである。タガ間には透し孔が穿たれている。２・５は胴上半部を欠く。底径は２が20cm，５が16cmを測る。外面は縦方向の刷毛目仕上げである。２の内面は指頭圧痕が透し孔の周辺に残るが，他はなで調整である。５は底部と透し孔の周辺に指頭圧痕が，その間には縦方向の指なで痕が残っている。２には外面の縦方向の刷毛目が下端まで及んでいない。５の底部外面は下から１本目のタガより約３cm下がったところから荒い原体による刷毛目が右下りに施されている。２・３・５は器壁断面が暗青灰色を呈している。

墳丘の築成（第９図，第10図）

墳丘の土層観察のため，東西，南北にトレンチを入れた。第９図に墳丘断面概念図を付けたが，残存部の状態がよく理解される。南北断面観察（第10図上）によると，地山の上に暗茶褐色の弥生土器包含層があり，この上から盛土が始まることがわかる。盛土はもっこ状運搬具によるものか，断面形がレンズ状を呈すものが多く認められる。盛土中には地山の土もかなり含まれているが，やはりレンズ状の断面形を呈すものが多い。南斜面部には，後世掘られた大き

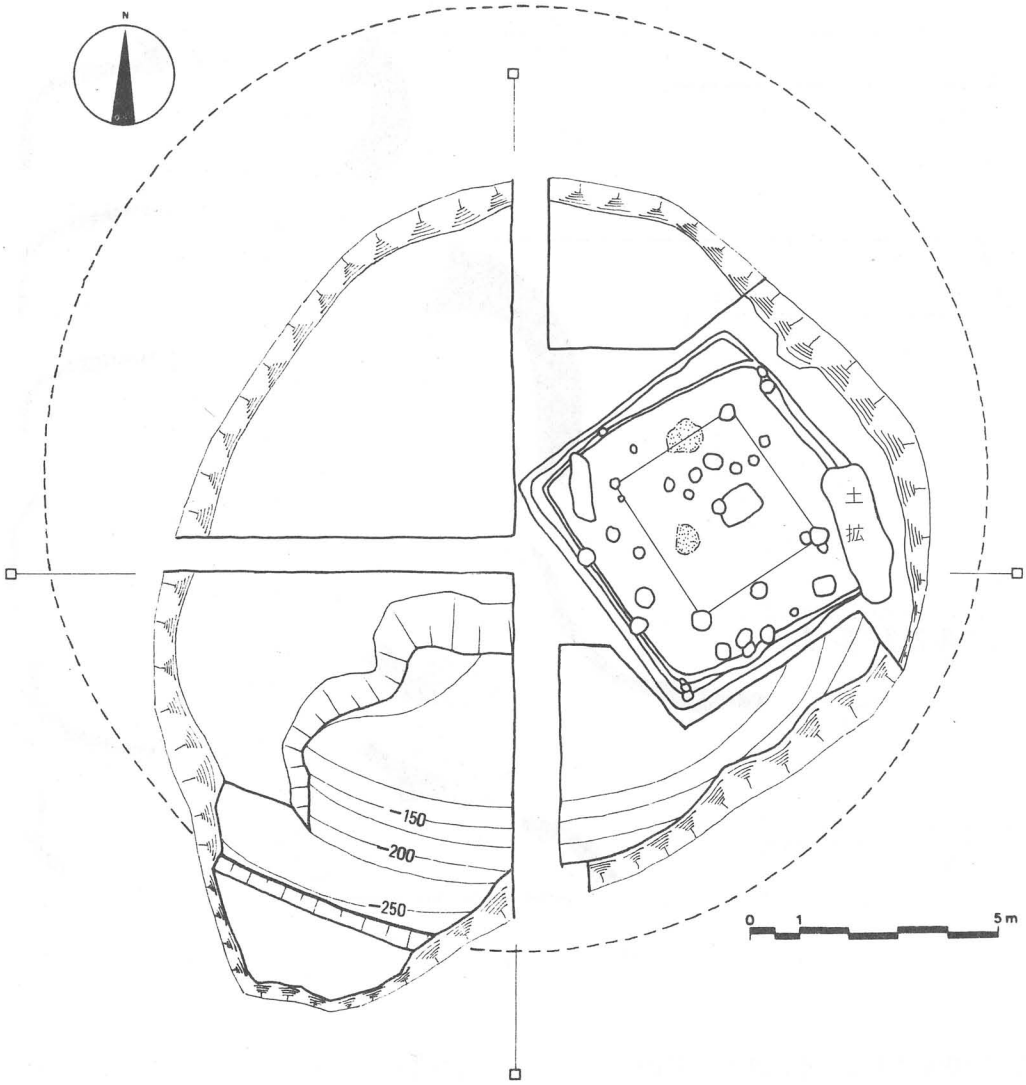


第11図　盛土内遺物実測図

な穴が観察される。東西断面（第10図下）では，南北断面にみられたようなレンズ状断面形の盛土は少なく，斜面に平行する盛土状況がうかがえる。

盛土内の遺物（第11図）

墳丘の土層観察のために入れた東西・南北２本のトレンチと住居址・土拡を掘り上げるために除去した盛土内から出土したものである。１～４は弥生土器，５～12は須恵器である。１・２は保存状態が悪く，大部分器壁表面が剥落している。１は大形の甕形土器である。口縁部端面は内傾する。上端部はつまみ上げ丸くおさめている。内面には浅い凹線がめぐる。外面は頸部に右下りの刷毛目がわずかに残っている。内面は胴部と頸部の境界まで横方向のヘラ削りが行なわれている。２は器台形土器である。口縁部端面にはわずかながら凹線が３本めぐっている。内面には横方向の刷毛目が若干残っている。３は甕形土器の底部である。外面は縦方向の刷毛目仕上げ，内面には指頭圧痕がみられる。底部には約１cmの孔が穿たれている。４は壺形土器の底部である。底部外面には叩き痕がみられる。内面は刷毛目仕上げである。底面には，細い葉脈の木の葉文様が観察される。須恵器については観察表をのせた。

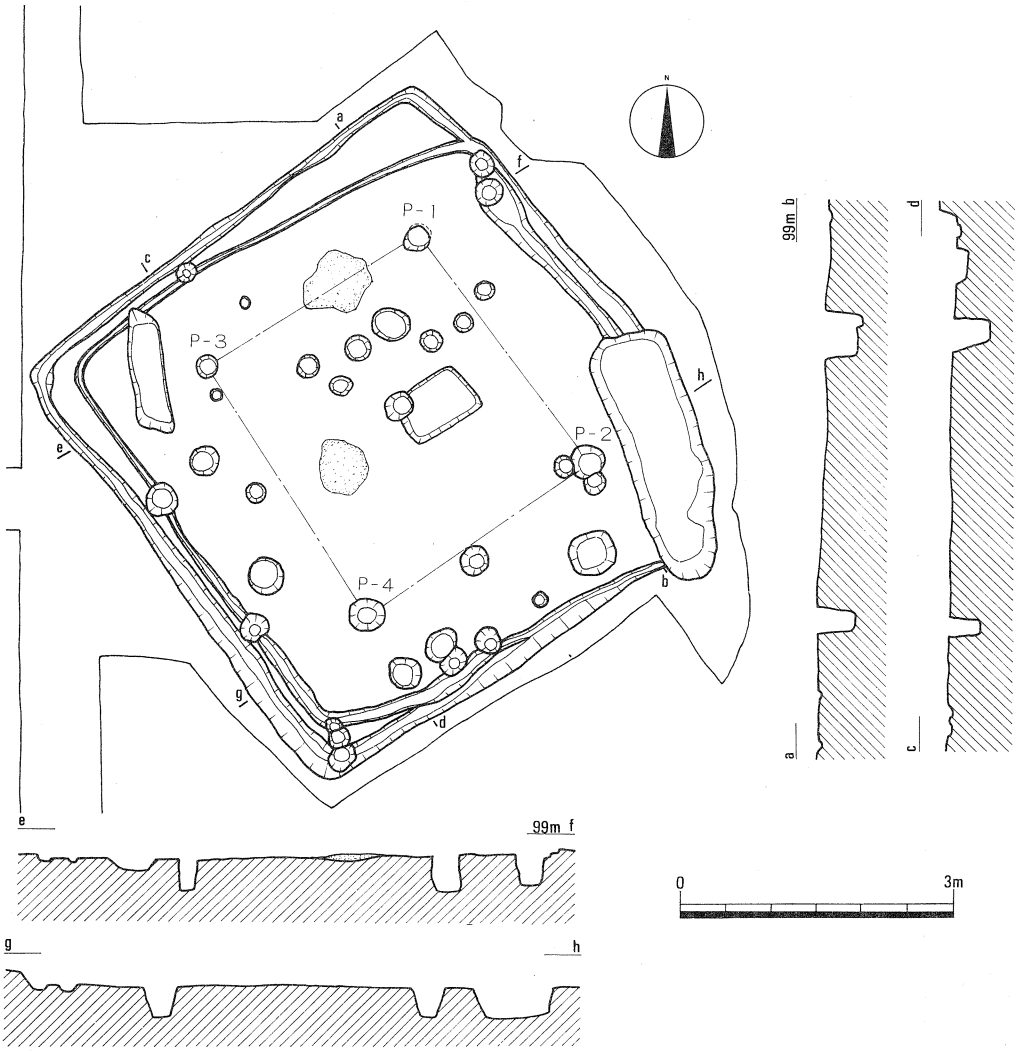


第12図　住居址　土拡位置図

盛土内出土須恵器観察表（第11図）

単位(cm)

番号	器　形	口径	器高	形　態・手　法　の　特　徴，そ　の　他
5	杯　蓋	12.1	5.6	天井部はていねいにヘラ削りを行なっている。天井部と口縁部とを分ける境界は鋭角に突出する。口縁端面はほぼ平らである。
6	杯　蓋	12.1	推定 4.6	天井部はヘラ削りをしているが，稜線は鈍く丸味をおびている。天井部と口縁部との稜は鋭い。口縁内面には鈍い稜がまわる。端部は丸い。
7	杯　蓋	推定 11.8	推定 3.9	天井部にはヘラ削りを施す。天井部と口縁部を分ける稜は鋭角に張り出す。微砂粒を多量に含む。口縁端部欠失。
8	杯　蓋	12.9		天井部はヘラ削りを行なう。天井部と口縁部を画す境界は短かく鋭角に突出する。内面と口縁端部の間には明瞭な稜線をつくる。
9	杯　身			２～３㎜大の砂粒を含む。器壁はやや厚い。口縁部は内傾し，受け部はほぼ水平に張り出す。底部はヘラ削りを行なっている。
10	杯　身	10.5		口縁部はほぼ垂直にたちあがり，端部は丸くおさめている。受け部はやや上方に立ち上がる。
11	高　杯	19.5		口縁部と底部を分ける稜は突出し，明瞭な稜線をつくる。稜線の下には波状文と沈線がめぐる。長方形の透し孔が３方にあけられる。
12	広口壺	19.9		外面は暗灰色を呈す。焼きは非常に堅い。口縁端面は平担に仕上げられ，下に断面三角形の突帯がつく。

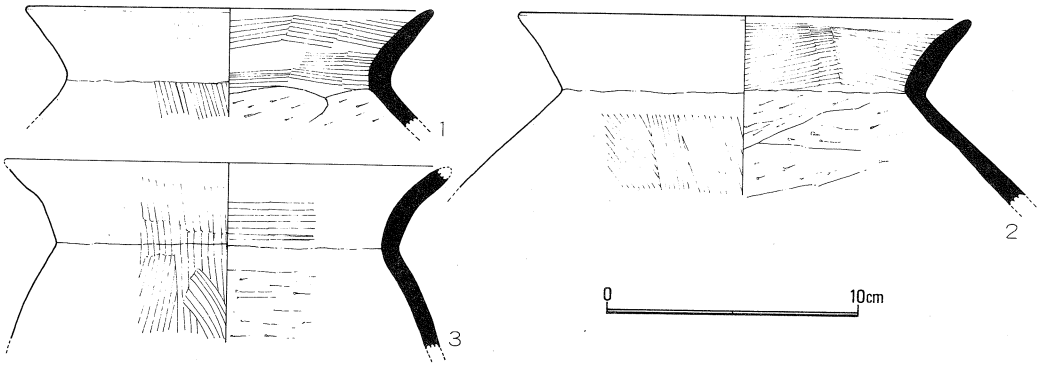


第13図　住居址実測図

第２節　住居址（第12図，第13図）

墳丘土層観察のための東西トレンチを入れた結果，墳丘東側において住居址と土拡が確認された。このため，盛土を除去し，全容を把握した。土拡は住居址東側において，重なり合った状態で確認された(第12図)。

住居址は２軒が重複して検出された。柱穴は４本であり，柱穴そのものの重複はなかった。このことから，柱穴はそのまま利用し，周溝を外方に拡張したことが考えられる。住居址の平面形は一角を北方向に向けたほぼ方形である(第13図)。拡張前の住居址は１辺約5.2m を測る。平面形は住居址の北と南の角が直角よりやや鈍角となっている。Ｐ-1は径30cm，深さ40cm，Ｐ-2は径35cm，深さ35cm，Ｐ-3は径25cm，深さ35cm，Ｐ-4は径37cm，深さ35cmを測る。Ｐ-1とＰ-2の間は 3.1m，Ｐ-3とＰ-4の間は 3.2m，Ｐ-1とＰ-3の間は 2.7m，Ｐ-2とＰ-4の間は 2.9m を測る。４本の柱穴のほぼ中央部には，長辺85cm，短辺60cm，深さ15cmの長方形中央穴が位



第14図　住居址内遺物実測図

置する。埋土は黒褐色粘質土であり，炭は認められなかった。床面にはＰ-1とＰ-2の間に約80cm×70cmの範囲と，この場所から南へ約２ｍの位置に約65cm×55cmの範囲２ケ所に焼土面が検出された。これは拡張前のものと，拡張後に移動したものと考えられる。周溝の幅は約10cm～15cmであり，深さは深いところで５cmと非常に浅い。

拡張後の住居址は，正方形より長方形に近い平面形を呈している。長辺約5.9m，短辺約5.6mである。周溝は北西辺がやや狭く，10cm～15cm，南西辺は広く30cm前後である。北東辺と南東辺は内側の周溝と接している。住居址内には，主柱穴，中央穴の他に長方形落ち込み，多数のピットが検出されたが，住居址との関係は不明である。住居址埋土は里褐色土である。埋土は住居址の南側においては，約20cmの厚さがあったが，北にいくにつれて削平を受けており，北端では周溝埋土の黒褐色土が帯状に残るという状態であった。土拡上での周溝は確認できなかった。

住居址内の遺物（第14図）

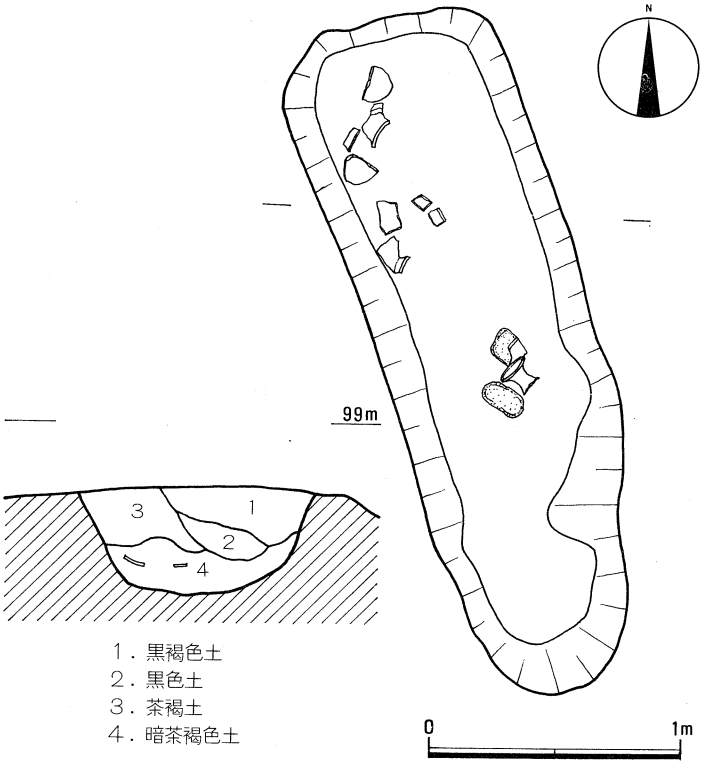
住居址の埋土は南半分ぐらいで，北半分は削平されておりほとんど残っていなかった。古墳の盛土はこの埋土上層より始まっており，住居廃絶後古墳築造までの間に整地されたものであろう。住居址北半部においては，盛土最下層と住居址埋土との境界が不明確であった。このため，床面に接していたものを住居址内遺物とした。住居址のＰ-1とＰ-3との間の焼土上面よりほぼ１個体と思われる土器が出土したが，いずれも小破片で保存状態も悪く復元できるものではなかった。住居址内遺物は数十点あるが，小砂片で図示できるものはわずかであった。

１～３はともに「く」の字状口縁で端部を丸くおさめている。１の口縁部外面には細かい縦方向の刷毛目が残る。頸部から胴部へかけては荒い縦方向の刷毛目で仕上げている。口縁部内面は荒い横方向の刷毛目を連続的に施している。頸部から胴部にかけては横方向のヘラ削りで仕上げている。頸部内面にはヘラ削りによってできた稜を形成する。２・３とも仕上げの手法は１と全く同様であるが，２は口縁部外面の刷毛目が認められない。頸部外面は１・３とも丸味を帯びているのに対し，２は角をもっている。３は１・２に比べて胴の張りが少なく，すらっと下方にのびている。３は外面の仕上げに口縁部から胴部にかけて連続して荒い縦方向の刷

毛目を用いている。器形はいずれも甕形土器である。

第3節　土　拡（第12図，第15図）

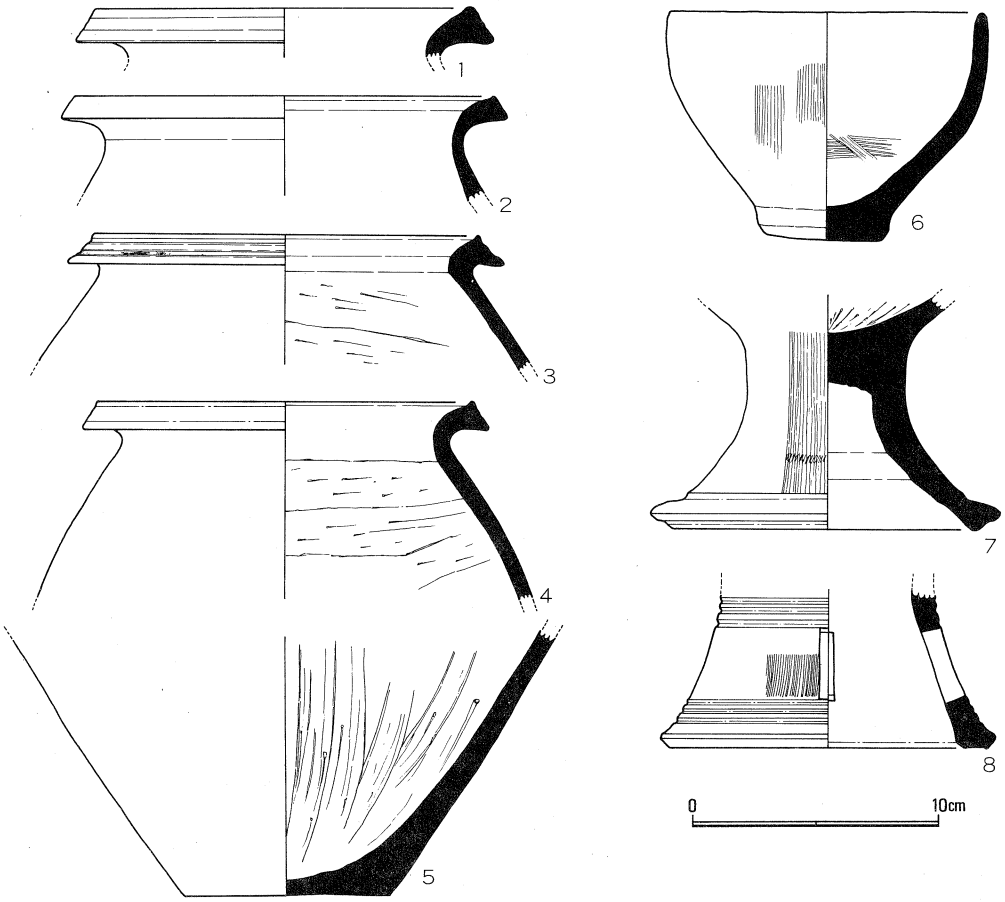
住居址の東側部分で検出された（第12図）。平面形はほぼ隅丸の長方形で，長軸を北方向に向ける。長辺2.8m，短辺 0.9m，深さ40cmである。床面は南に向かってゆるやかに上がっている（第15図）。



第15図　土拡及び遺物出土状態実測図

土拡内の遺物（第16図）

埋土下層の暗茶褐色土より出土した。いずれも床面から約10cm浮いた状態で出土した。1～5は甕形土器である。いずれも小破片で完形品はない。1～4は口縁部である。1は内傾する端面に退化した沈線が2本めぐる。2は口縁端面に沈線は認められず，なで仕上げである。口縁端部は上方へ少し拡張している。3はかなり内傾する端面で，端部は下方へ大きくのびている。端面には2本の凹線がめぐる。内面は横方向のヘラ削り仕上げである。4の口縁端部はやや上方に拡張し，端面には2本の沈線がめぐる。内面は頸部まで横方向のヘラ削りが及んでいる。いずれも保存状態が悪く，外面の調整は不明である。5は底部である。外面はなでによる仕上げ，内面は下から上へのヘラ削りを行なっている。6は椀形土器である。保存状態が悪く，器表はかなり剝落しているが，外面には縦方向の刷毛目が，内面には横方向の刷毛目が若干観察される。口縁端部は丸くおさめている。7は高杯形土器の脚部である。脚端は外方に張り出しているが，端部は丸くおさめている。端部上方には浅い凹線がめぐり，低い段をなしている。外面は縦方向の刷毛目による仕上げである。杯部内面はヘラ削りを行なっている。8は器台形土器である。長方形の透し孔が穿たれる。透し孔の下方には3本，上方にも凹線がめぐる。外方に張り出す端部は丸くおさめるが，端部内面と底面との境界には鈍角な稜を作っている。底面と端部との境界はやや下方に張り出している。外面には透し孔の下半より縦方向の刷毛目が観察される。上半及び内面はなで調整である。

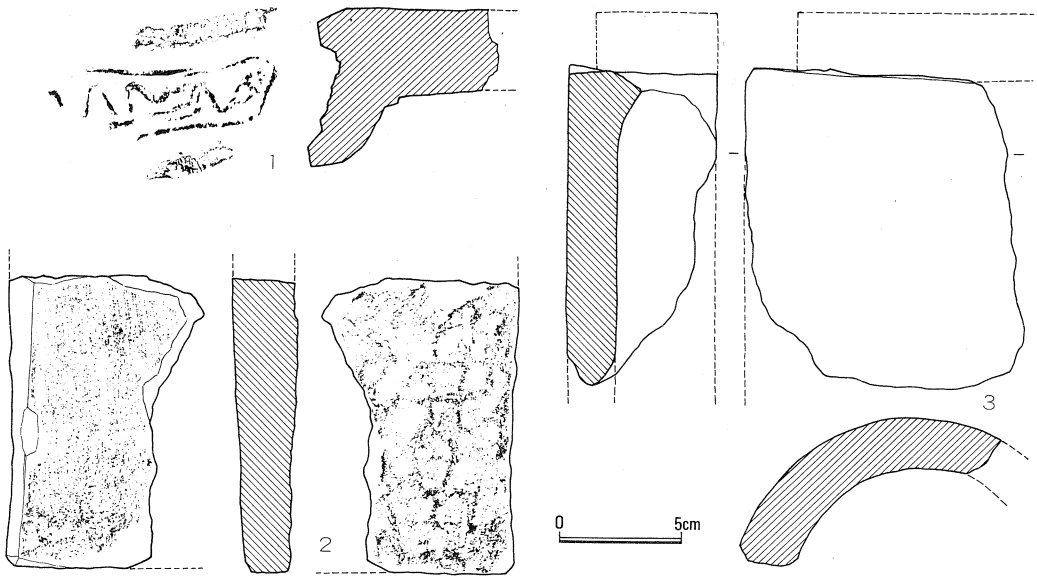


第16図　土拡内遺物実測図

第4章　結　　語

本調査では，それぞれ時期の異なる3つの遺構を確認した。古い方から土拡，住居址，古墳という順である。土拡の時期は出土土器（第16図）からみると，弥生時代中期末から後期初頭にかけての時期と考えられる。この中で中期末頃と考えられるのは，　8であり，残りの土器は後期初頭と考えられる。従って，土拡の時期は弥生時代後期初頭としておく。この弥生時代中期末から後期初頭にかけての時期は，丁度津山盆地の各地において弥生時代社会が定着する時期にあたり，当該地も例外にもれず弥生時代社会が定着した時期であろう。現在のところ，周辺での弥生時代集落は調査されてないが，付近の水田地には広範囲にわたって土器が散布することから，畝山丘陵を背後にした大集落が存在したことが推測される。土拡の性格は不明であるが，墓と考えておきたい。

弥生時代集落はやがて古墳時代へと受け継がれる。畝山丘陵には津山地方で最古の首長墓と考えられている日上天王山古墳が登場する。5世紀後半頃になると日上畝山古墳群が形成され



第17図　表採瓦実測図

始める。日上天王山古墳，日上畝山古墳群形成の背景には，弥生時代集落から継続的に発展してきた古墳時代集落が当然関与したことであろう。この時期の土師器については十分な編年研究が行なわれていないのが現状であるが，調査した住居址の時期は出土土器（第14図）からみて，５世紀代と推測される。この住居址が日上畝山古墳群形成に関与した集落の１軒に相当するものと考えられる。

６世紀代になると集落の移動があったことがうかがえる。すなわち，住居址の埋没後日上和田古墳が占地していることである。古墳の墳丘盛土内には弥生土器，古式須恵器が包含されていることからみても，前述したような弥生時代中期末あるいは後期初頭からの流れが読み取れるであろう。盛土中の土器（第11図）には３・４など土拡内出土土器よりも後出的で後期末頃の土器も含まれている。須恵器は全て古式のものである。中でも５は最古の一群に属するものである。これらの須恵器は多少の時期差はあれ５世紀後半頃のものであり(註１)，畝山古墳群形成期にあたる(註２)。日上和田古墳の築造時期を確実に決める遺物の出土状態,遺構はない。しかしながら，土取りの際に二次的に移動したものと考えられる墳丘表面及び表土中遺物があげられる。これらの遺物は原位置こそ保っていないが，本古墳との伴出は間違いないであろう。須恵器（第６図）２・３の杯蓋は天井部と口縁部との境界に明瞭な凹線がめぐり，口縁端面はやや内傾し，内面との間に稜を形成するなどの特徴をもっている。これらの特徴から６世紀前半頃の時期と考えられる(註３)。１はやや後出的なものと考えられるが，他は同時期のものである。ハニワは全て外面縦方向の刷毛目調整，円形の透し孔，低台形のタガ，下細りの器形などの特徴があげられる。これらの特徴はⅤ期の新しい時期と考えられ，６世紀前半頃と考えら

れる(註４)。このハニワの時期は須恵器の時期とも一致し，日上和田古墳の築造時期を６世紀前半に比定することができよう。

日上畝山古墳群は５世紀後半から６世紀前半にかけての古式の群集墳であると考えられている。日上和田古墳は丁度６世紀前半頃の築造で，日上畝山古墳群の終末期にあたる。また，畝山丘陵から南へ援やかに延びた低丘陵上に位置することからみても，日上畝山古墳群との強い関連が考えられよう。

註

（１）　田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古クラブ　1965

（２）　この時期の須恵器として日上高祖神社裏古墳出土のものがある。

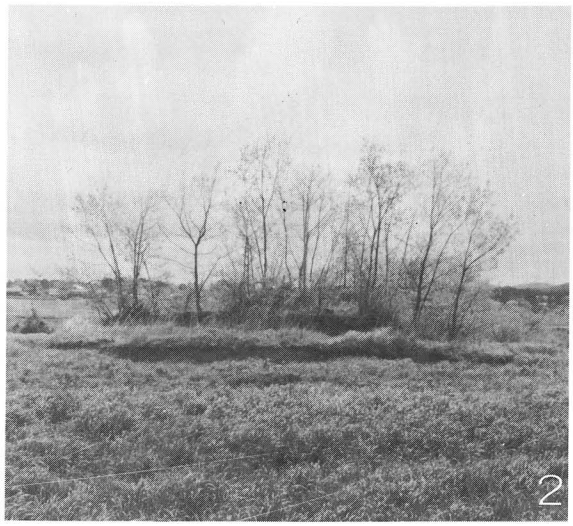
（３）　田辺昭三　前掲書

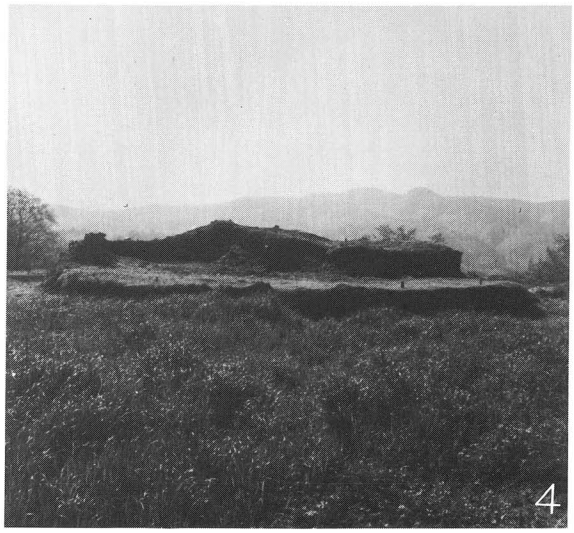
（４）　春成秀爾　「埴輪」『考古資料の見方(遺物編)』　1977

尚，調査中３点の瓦を採集した(第17図)。１は軒平瓦，２は平瓦で凹面は布目，凸面は荒い格子目の叩きである。３は丸瓦である。１の軒平瓦の内区は唐草文が変形し，くずれたものである。外面には１本の孤線がめぐる。外縁は高い。この特徴は美作国分寺軒平瓦Ⅱ型式のくずれたものであり，平安時代末頃と考えられる(註５)。日上和田古墳は美作国分尼寺跡南西約500m の近距離に位置することからなんらかの関連がうかがえよう。

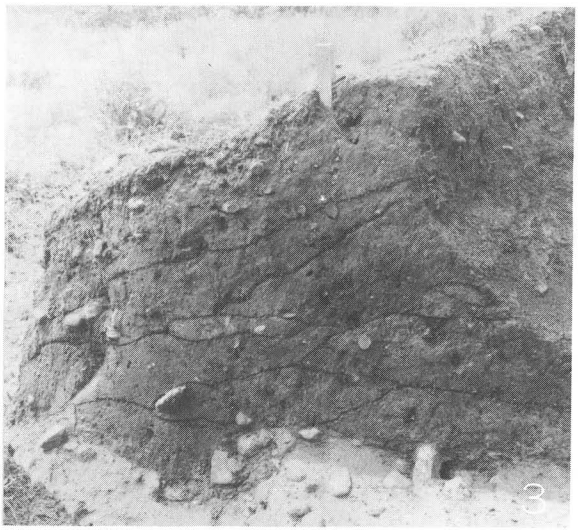
註

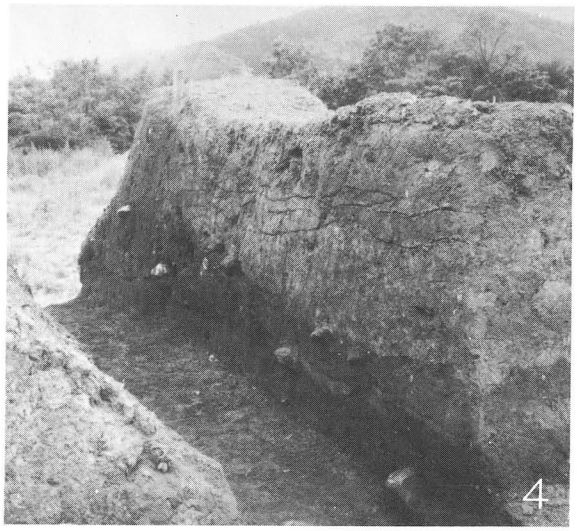
（５）　湊　哲夫氏の御教示による。

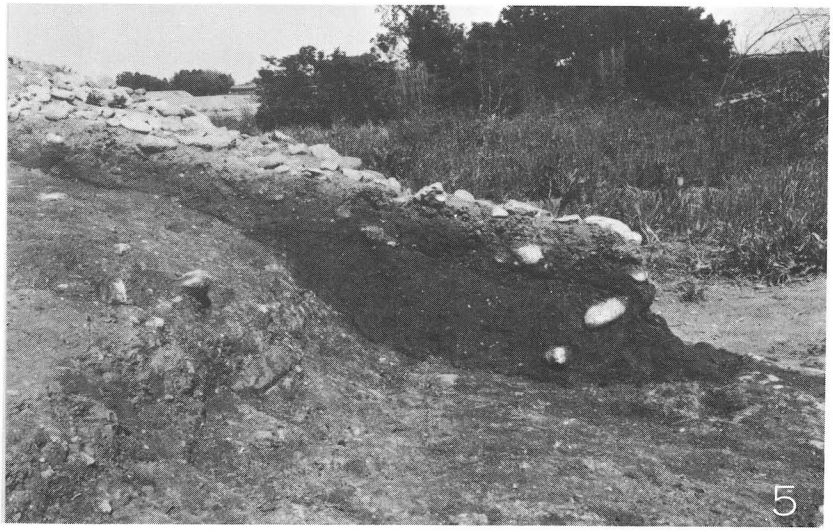




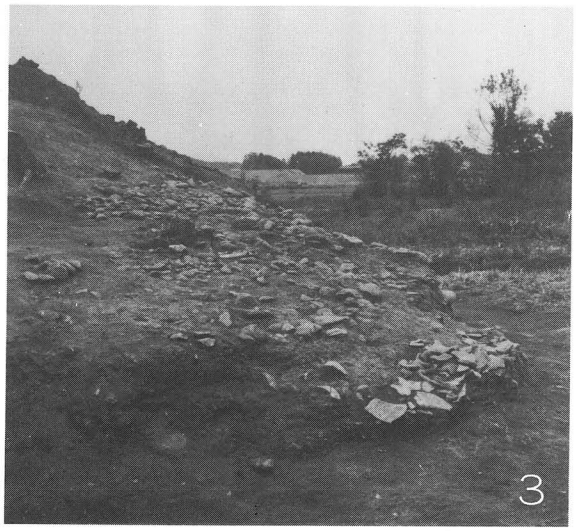
1．調査前(東から)
2．調査前(北から)
3．立木伐採後(東から)
4．立木伐採後(北から)
5．古墳発掘風景
6．古墳発掘風景



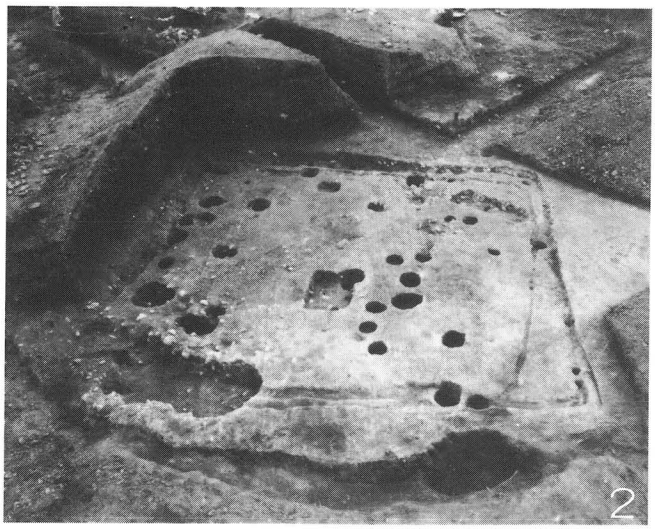


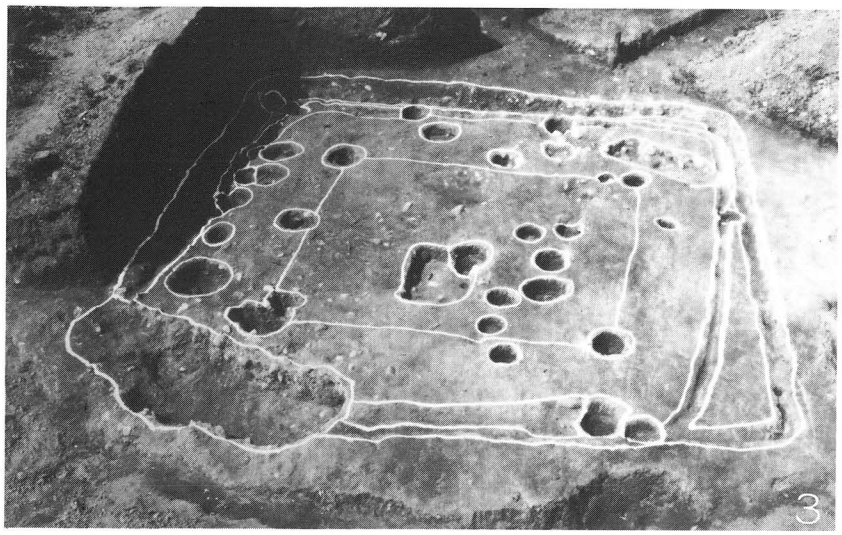


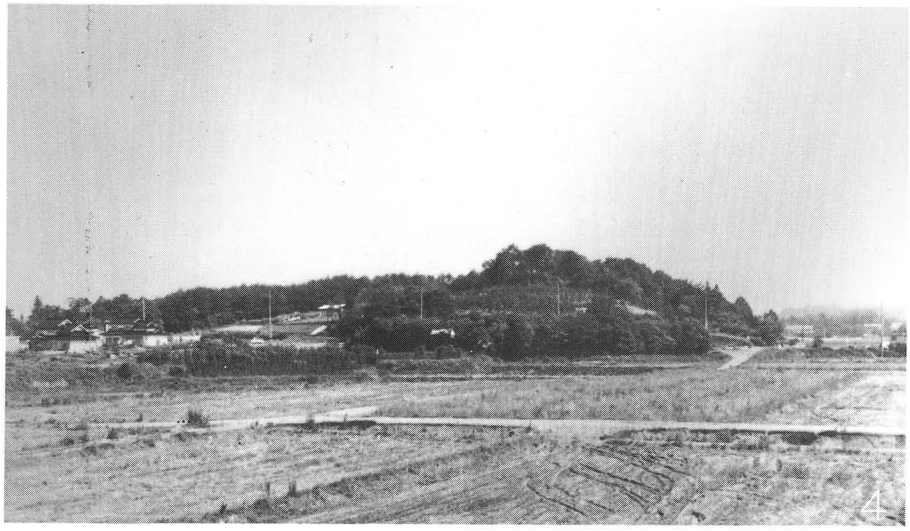
1．周湟(西から)
2．周湟(東から)
3．墳丘東西断面
4．墳丘南北断面
5．周湟断面



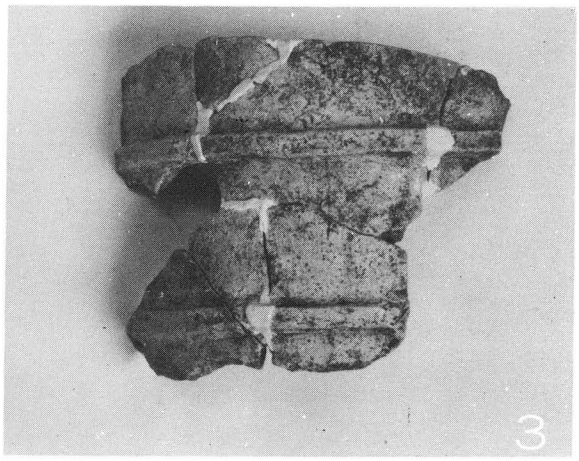
1．集石出土状態
2．ハニワ出土状態
3．集石・ハニワ出土状態(西から)
4．住居址発掘風景

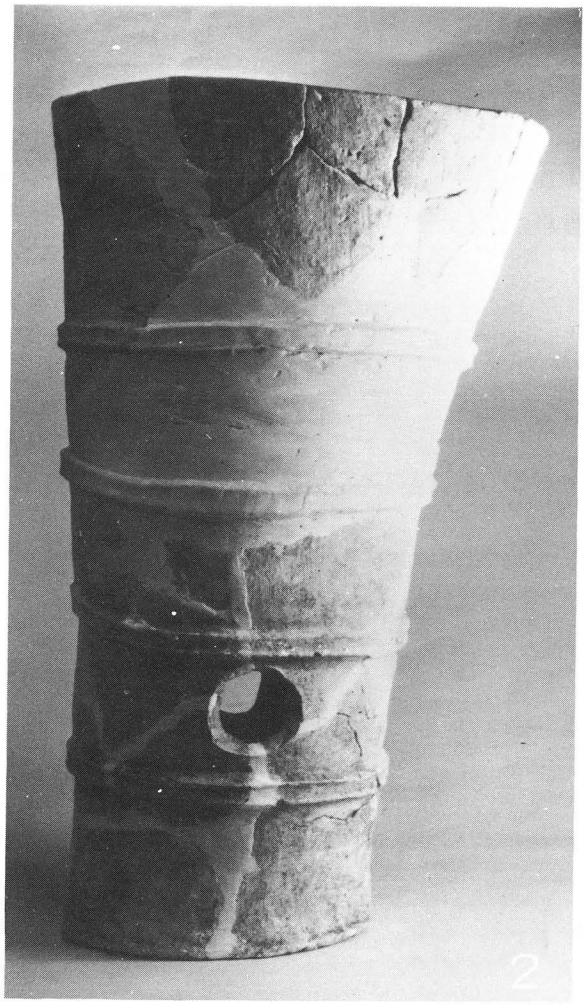


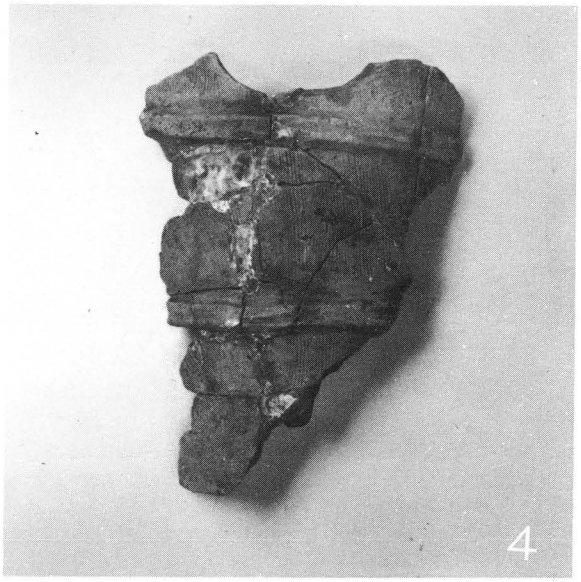




1．土拡及び土器出土状態　　2．住居址・土拡
3．住居址・土拡
4．和田古墳より畝山古墳群を望む

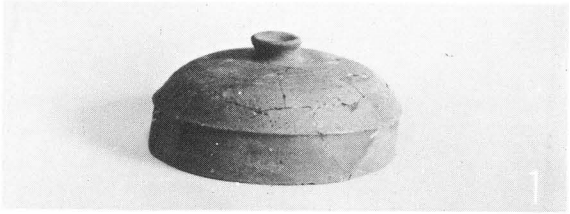


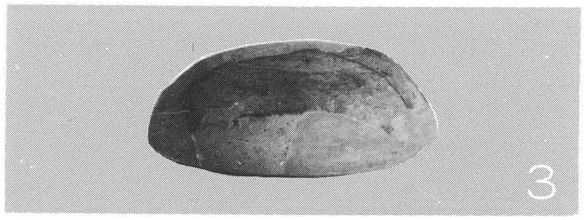


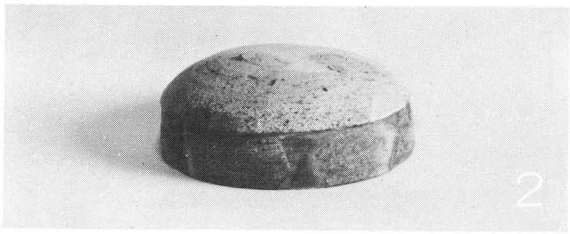


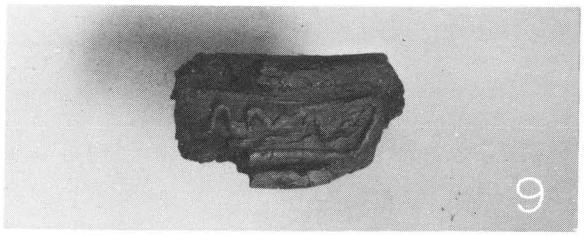
1～5　墳丘表土中出土ハニワ

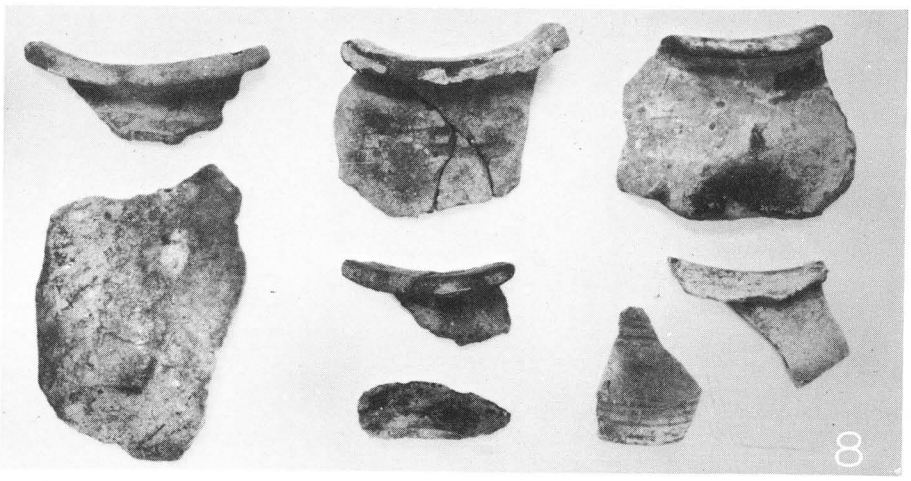
出　土　遺　物　(1)











1・2　盛土内出土須恵器
6～8　土拡内出土弥生土器

3～5　墳丘表土中出土須恵器
9　表採瓦

出　土　遺　物 (2)

日上和田古墳発掘調査報告

昭和56年３月31日発行

発行　津山市教育委員会

岡山県津山市山下97番地の１

印刷　有限会社　弘 文 社

津山市川崎 168